



# ピッポ新聞

2006  
10  
No.214

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

## ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

### 絵本雑感

#### 新刊絵本と欧米の古書絵本

子どもの本屋として、新しい絵本 (新刊) との出会いほど心弾むことはありません。それが既存の作家の絵本であれ、新人作家ものであれ変わりません。しかし、そんな喜びもこのところぐんと減りました。「なんだ! この絵本は」「すげーな!」なんて感嘆詞が思わず出てくるような絵本との出会いがめっきり減ってしまいました。

その一方で、相変わらず、毎日まいにち新しい子どもの本は出版され続けています。ある資料によると、2005年の新刊絵本の出版点数は2218点だそうです。これに物語の本やノンフィクションの本などを加えれば、いわゆる児童書と呼ばれる本の出版点数はかなりの数にのぼります。

聞けば、絵本の初版の刷り部数はだいたい3千

〜5千部ぐら

いだとつです。

工業生産品の

よつに何十万

何百万とは言

いませんが、

いくら本は多

品種少量生産

でも、これで

「Under The Window」ケイト・グリーナウエイの最初の絵本。現品は初版かそれに近い版・木口木版ならではの色合いがよい。販売価額68,000円 (消費税込み)

は少なすぎませんか?

こうして出版された新しい絵本の半年後、1年後の行方ですが、そのほとんどは本屋の店頭にあります。売ってしまった (読者の手に渡った) のであれば喜ばしいのですが、本屋の店頭には次の新刊が飾られて、今まで飾られていた絵本は出版社へ返品されて、店頭 (読者の前) から消えてしまっています。

仕組みがどのようになっているのか、詳しく知りませんが、人ごととは言え、これで元が取れるのか心配になってしまいます。目立つのは出版点数の多さだけです。

何よりも絵本好きとして、また子どもの本屋として、点数をたくさん出すよりも、編集者 (作者もです) が「これだ!」という本を丁寧に作り、時間をかけて大事に売っていけないものではないでしょうか。粗製乱造が過ぎるのではないのでしょうか!

何故こんなことを思うのかというと、ぼくは、絵本で大切なことは、美しく (芸術的で) なければならないと考えているからです。その理由は絵本は子どもが初めて出会う本だからです。子どもは美しいものと出会うことによって、美に対する感性がはぐくまれていくのだと信じているからです。幼児期において必要なことは、具体的な知識や

技術(英語だとかピアノだとかサツカーだとかを他の子よりも早く・多く・上手)を習得させることでなく、「あそび」を通じてさまざまな楽しい経験をたくさん積むことだと思つています。そのことによつて子どもの感性ははぐくまれていくのです。

レーチエル・カーソンはその著書「センス・オブ・ワンダー」の中でこう言っています。

「子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や智恵を生みだす種子としたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激……、さまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてよく知りたいと思うようになります。このようにして見つけだした知識は、身につきます。……。」(佐学社・上遠恵子・訳)

## 古書絵本の良さ

さて、絵本は「美しくなければならぬ」という観点から、毎日まいにち出版されている新刊の絵本を眺めた場合、それらのうち何冊がこのことに耐えうるか、ぼくは、はなはだ心もとなない感じに囚われます。なぜ、こんな思いを抱くようになったか

というと、ピツポ古書クラブを始め欧米の古書絵本の素晴らしさに接する機会を持つようになったことがその原因の一つだと思ひます。

十九世紀の後半から二十世紀の初めにかけて、絵本の黄金時代と呼ばれる期間があり、その先駆と言われるのが、イギリスのウォルター・クレイン、ケート・グリーナウェイ、ランドルフ・コールデコットの3人です。

そして、彼らを世に送り出したのが、エドモンド・エヴァンズです。エヴァンズは多色刷りの木口木版を完成させ、3人の作品を木口木版で刷り絵本にしたのです。これらの絵本(トイブック)はさまざまなかたちで、ヨーロッパの多くの画家に影響を与えました。

ベスコフやクライドルフの絵本を見れば、クレインの影響を受けたであろうことは容易に想像できます。また、「ピーターラビット」を描いたポターは、コールデコットの作品が大好きだったといひます。

ぼくは今、これら百年以上前に出版された絵本を横に置いてこれを書いていひます。百年以上前の絵本が、海を越え、時代を超えて今ぼくの手にある、ちよつと不思議な気がしますが、古書の良さはここにあるのです。

たとえば、今手にしているのが、1878年に出されたケート・グリーナウェイの『UNDER THE WINDOW』(窓の下)です。この絵本は初版が2万部も刷られたそ

うです。当時としては比較的値段も高価だったといふことですが、またたくまに売れてしまったそうです。

この絵本を出したエヴァンズは、その日記にこう記しています。「初版は、私が2刷りを刷りあげる前に売り切れてしまった。その間、『窓の下』はプレミアムつきで売られた。増刷は7万部にとどくまで続けられた」

ちなみに、今ぼくが手にしている「UNDER THE WINDOW」は原出版社のラウトリッジ社版ですから、初版の2万部の中の1冊であるか、それとも重版の7万部の中の1冊であるのです。いずれにしても、最初の版木でエヴァンズの工房で刷られた絵本であることは間違いありません。

この絵本はグリーナウェイの自作の詩に絵を添えもので、彼女の最初の絵本です。彼女の描いた子どもや女性および、そのファッションは当時とても人気があつたそうです。現在でも、この「窓の下」は人気のある絵本です。

色別に彫られた版木を重ねて刷つていきますから、色の重なつた部分は何とも言えない良さがあります。その色の風合いは本物でなければ味わえないものです。

## クライドルフの絵本

同じようにスイスの絵本作家エルンスト・クライドルフ(1863-1956)の最初の絵本『Blumen-Marchen』(花のメルヘン)も手にとって開くと、その芸術性



の高さに驚かされます。この絵本は1898年に出されたたもので、手刷りの石版印刷でクライドルフ自らが印刷にも関わって作られた絵本です。



『花のメルヘン』 1898年初版  
販売価額 472,500円(消費税込み)

この絵本は初版です。発行年の表示はありませんが、出版社がピローティ・ウント・レーレ社であることからそれが読みとれます。この後、1900年にはシャフシュタイン社に移って出版されます。初版本は今ではとても貴重で入手は困難です。

一つの画面には8枚から10枚の石版が用いられています。内容は擬人化された花や昆虫の超自然な世界が展開されています。

ある場面の絵の中に、ネコヤナギが描かれている横には猫が丸まってたたずんでいます。よく見ればそのネコヤナギの花の一つに猫が描かれています。こんな何気ないユーモアも含んだ楽しい絵本です。特筆すべきは、やはり石版印刷でしかだせないであろうその繊細で柔らかな色合いです。その美しさには、現代の絵本が霞んでしまうほどの感じを持ちます。



さて、最初にぼくは現在の最新絵本の初版の刷り部数は5千部ぐらい(すべての絵本の初版がこの部数というところでは勿論ありません)と書きましたが、これらと比べると、およそ130年前のグリーン・ウエイの『UNDER THE WINDOW』の初版2万という部数にまず驚かされます。さらに7万部も重版され、ヨーロッパやアメリカで人気を博したということ。クライドルフのほうは16枚の水彩を石版に描くのに1年の月日を掛けたそうです。こうした結果、「美しい」絵本ができたわけです。製版技術も印刷も今では飛躍的に進歩したわけですが、これらの絵本と、現代の絵本を見比べて見て、その違いに愕

然とさせられます。

敢えてぼくはもう一度強調したいのです。現代の「美しさ」を無視した絵本の氾濫は、粗製乱造の結果だということを!

1978年に河出書房から出された『絵本不思議な国一覽』に矢川澄子は「反絵本待望論」という一文を載せている。28年前の文章ですが、この中に我が意を得たりという個所があったので最後に引用します。

(これはコルドコットなどのヨーロッパの絵本の黄金時代の絵本の複製について語った個所です)

.....わたしも瀬田氏にならって、つきせぬ哀惜をこめていおう。あの頃は、美しかった、と。

哀惜?そう、それはまさしく痛恨な哀惜なのだ。なぜなら昨今、その頃の名作の複製がしきりに行われるようになったけれど、その大方は初版当時のゆたかな色調におよぶべくもない、むざんなありさまなのだ。図柄はさておき、色と色彩に関するかぎり、かつての美しさをそのままとどめているものは皆無といってよい。

印刷や製版の技術はこの百年のまにめざましい進歩向上をとげたはずなのに、これはまことに奇怪な現象ではなからうか。油絵や壁画の複製ならばともかく、絵本のばあいは少なくとも版画として、印刷ということがはじめから予定されているはずである。それがかつての複雑繊細な色調すら保ちえぬままに横行しているとは、いったいどういうことか。絵本はどの段階で芸術作品であることをやめるのだろうか。そのよつなもので、往時をしのぶよすがとして、ないよりはあった方がいいといえはいるのかも

れない。しかしこのことの裏に、この社会全体にはびこっている絵本芸術そのものにたいする無意識の蔑視みたいなものを嗅ぎつけるのは、わたしだけだろうか。……。

さてさて、28年前にこのように絵本について語った矢川澄子は、昨今の「読み聞かせ」ブームに乗じて、我もわれもと既存の絵本を大型絵本化して出版している出版社や、これを容認あるいは積極的に受け入れている絵本作家たちを見たならば、何と書くだらうか？

「大型絵本は芸術とは非なる醜い絵本である」とでも論じるのだろうか？ ぼくはとても興味の湧くところでありませぬ。

**回答をいただけませんか？**

**福音館書店常務取締役**

**小倉昇 様**

拝啓、いかがおすごしですか。

今朝(8日)地元紙は写真入りで、富士山に初冠雪があったことを報じていました。

おりからの低気圧によって荒天のため海や山での遭難も伝えていきます。そう、季節は

確実に秋へと進みました。

小倉さん、ぼくが貴社へ再度公開質問状をだしたのが、7月号のピッポ新聞紙上でした。しかしながら、それに対して、いまだ回答をいただいております。

再三述べているように、今回ぼくは読者の立場で貴社にどうしても質問したかったのです。

このまま貴社からの回答をいただけないと、内容が尻切れトンボの状態で終わってしまいます。

福音館書店がどんな答えを出すか心待ちにしている読者(この場合の読者はピッポ新聞のという狭義な意味でなく、福音館の読者という広義な意味です)が失望すると思えますよ。

それよりもなによりも、貴社の出版している本についての質問ですから、出版社として答える責任があるのではないのでしょうか。どうぞ、回答をくださるようお願いいたします。

質問内容は既に7月号をお手元までお送りしてありますからそれをお読みいただければと思いますが、ここでは要旨だけ箇条書きにしておきます。

1、専売品について

毎年多数の絵本を他には(一般読者には)一切流通させないで、こどものとも社だけ

に流通させる為に専売品として出版しているのはどうしてですか？

このような行為は一般の読者を差別することになりませんか？

2、二重価格について

一般の流通ルートを品切れにしておいて、こどものとも社だけのために重版して、しかも、同じ本なのに値段をこれまで流通させていた値段(「みるずかん・かんじりずかんシリーズ・1365円)よりも、こどものとも社の専売品(「ずかんライブラリー」1000円)のほうを365円も安くしたのはどうしてですか？これは一般読者への裏切りではないのですか？

3、限定出版について

本の表紙に限定出版とシールを貼って、読者に訴求したのにもかかわらず、売り切れたら直ちに重版したのはどうしてですか？貴社の「限定出版」とはどんなことを指すのかご説明をお願いいたします。

小倉さん2度目の質問状を出してから、すでに3ヶ月が経ちました。季節も初夏から中秋へと移っています。今日まで回答をいただけないという状態は、とうていぼくには理解できないことです。1日も早く回答くださるようお願い申し上げます。

ピッポ 伊藤俊男